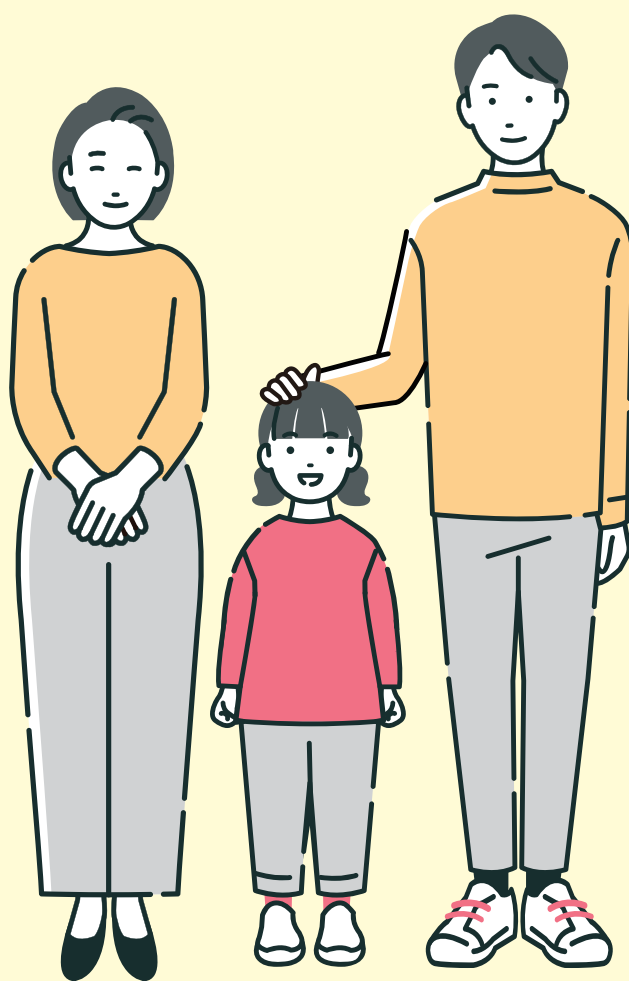


お・子・さ・ん・が ど・も・り は・じ・め・た・ら



吃音はなおるの？

幼児期を 過ぎて 続くことも

幼児期に吃音が始まった子どものうち約8割は、成長とともにすらすらと話せるようになります。そのため「しばらく様子を見ましょう」「そっとしておけば大丈夫ですよ」などと、不確かな助言をする人もいます。しかし、約2割は幼児期を過ぎても吃音が続きます。様子を見ているだけでは、吃音が出るかどうかを気にしながら話すようになったり、話したいことをあきらめたりするようになる心配があります。



適切な 関わり方を



目の前にいる子どもがすらすら話せるようになるかどうかを、正確に予測することは今のところできません。吃音のあるお子さんにとって適切な関わりをして、吃音が消えても消えなくても、話したいことをのびのびと話せることを目指しましょう。

お友だちやきょうだい、いとかなどに、からかったり真似したりしないよう伝えておきましょう。

吃音について

言葉がどもることを吃音（きつおん）といい、次のような話し方が見られます。



繰り返し



引き伸ばし



なかなかでてこない
(ブロック)

・話すときに、顔や体の一部に力が入ったり動かしたりすることがあります。(随伴症状)

* 流暢に話せないことは小さいお子さんではよくみられることで、

「ぼくね、ぼくね」といったように、単語や文節全体をくり返すものは吃音ではありません。

吃音の原因

本人のもつ生まれつきの要因が大きいことが分かっています。ストレスや家庭環境、本人の性格（緊張しやすい、気が弱い等）によるものではありません。

幼児期の吃音

吃音は2～5歳で始まることが多く、幼児期に吃音が見られる子は約8%いるといわれています。

成人の吃音

大人で吃音のある人の割合は、人口の約1%です。これは「田中」という苗字を持つ人の割合とほぼ同じです。教師、弁護士、俳優など、話すことの多い職業で活躍する人もたくさんいます。

吃音のある子どもへのかかわり方

お子さんの話を聞くときは

- ・お子さんの話し方ではなく、話している内容に耳を傾け、話す意欲を大事にしましょう。
- ・お子さんの話を最後まで聞くようにしましょう。
- ・吃音が出ても、心配そうな表情をするのは控えましょう。
- ・言いたいことの手取りや、以下のような話し方への助言をしたり、言い直しをさせたりするのはやめましょう。

✕「落ち着いて。ゆっくり話してごらん」 ※緊張しているから吃音ができるわけではありません。

✕「そんなにどもってないから大丈夫だよ」 ※吃音が悪いことというメッセージになることがあります。

お子さんに話しかけるときは

- ・お子さんが話し終えてから、少し間をおいて話し始めましょう。
※お子さんの話にかぶせて話し始めないように注意しましょう。
- ・お子さんが無理なく聞き取れる速さ、わかりやすい言葉で話すように心がけましょう。

症状の波に一喜一憂しない

- ・吃音の症状の出方には、週～月単位での波があります。
- ・症状がほとんど出ていない時期の後に、強く出ることもあります。
- ・まわりの大人は、症状の波に一喜一憂しないようにしましょう。

お子さんと吃音の話をする

「たまに話しにくいことがある」「ほかの子と話し方がちがう」といった意識を、子どもは早いうちから持っているといわれています。

「自分の話しづらさについて、親が分かってくれている」と子どもが実感できることは、安心感への第一歩となります。

※お子さんと吃音の話をしたからといって、吃音が悪化することはありません。

声かけの例

「あ、あ、あ、あってなるのは、きつおんといって、悪いことじゃないんだよ」

「〇〇くん（ちゃん）と同じような話し方をする人は、いっぱいいるんだよ」

「ひとりひとり話し方は違っていいんだよ」

「困ることがあったら、いつでもおしえてね」



安心して話せる環境づくりを



周囲の理解は
吃音のある子どもへの応援になります。

周囲が吃音について理解を深め、適切な関わりを行うことは、吃音のある子どもにとって大きな支えとなります。このパンフレットの内容を実践したり、周囲に吃音の理解を広げたりしながら、吃音があってもものびのびと安心して話せる環境づくりを目指しましょう。

園の先生、お友だちの保護者、祖父母や習いごとの先生など、まずは周りの大人に吃音について理解してもらうことが大切です。その際は、このリーフレットをぜひご利用ください。

各地で開催されている親の会では、思いを分かち合える親仲間と出会えます。

吃音のあるお子さんの子育てで心配が続くときは、専門家（言語聴覚士）に相談したり、親の会とつながりをもったりしながら、お子さんに寄り添うヒントを得て、ともに歩んでいきましょう。

制作：NPO 法人
全国言友会連絡協議会
社会的支援推進委員会

ホームページ <https://www.zengenren.org>
Mail info@zengenren.org



令和6年8月21日（第2版）

監修：富里周太（医師・慶應義塾大学医学部耳鼻咽喉科頭頸部外科学教室）
田宮久史（言語聴覚士・JA 岐阜厚生連 飛騨医療センター 久美愛厚生病院）
安井美鈴（言語聴覚士・大阪人間科学大学保健医療学部言語聴覚学科）
戸田祐子（きつおん親子カフェ代表）

このリーフレットの
ダウンロードはこちらから